

# 霞

—2011年度夏季展示室だより—

土浦市立博物館

平成23年7月1日発行(通巻第16号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(2~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展示会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

## 古写真・絵葉書にみる土浦(16) 古写真 「商店の出荷風景」



折箱製造業を営んでいた折清商店(現中央一丁目)の大正時代の出荷風景です。職人たちは「折清」と染め抜かれた揃いの印半纏おりせいでんを着ています。荷物は大八車だいはちぐるま(写真左)か自転車べいこくでかなり遠方まで配達したようです。建物は明治34(1901)年に建てられた米穀取引所で、後に折清商店となりました。【情報ライブラリー検索キーワード「印半纏・商店」】

### 目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(16)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【館長講座及び各展示と催し物等】
- 中峰和尚像(中世)・・・2
- 土浦藩の関流砲術(近世)・・・3
- 江戸時代の日記にみる夏の行事(近世)・・・4
- 商家と出入りの職人たち(近代)・・・5
- 明治期の入園願(近代)・・・6
- 市史編さんだより・・・7
- 霞短信「文化財映像学」・・・8
- コラム(16)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

## 博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★ 「私の考古学五十年」と題し、考古学者としての歩みをお話しします。

7月17日(日)・8月21日(日)・9月18日(日) 午後2時~(1時間30分程度) 視聴覚ホールにて

★★夏休みファミリーミュージアム テーマ展「侍ファッション—刀装具の世界観—」★★

テーマ展会期 7月23日(土)~9月4日(日) 武士の主義主張をも意味した刀装具の世界観をご紹介します。

●展示解説会 7月30日(土) 午後2時~(30分程度) 講師:当館学芸員 ※事前申し込みは不要。(入館料要)

○「和とじ本をつくらう」 8月23日(火)・24日(水) むかしながらの製本技術を体験します。

午前10時~12時、午後1時~3時半までの随時(20分程度) 講師:当館学芸員・非常勤職員

定員:同時に4人まで体験できます。 ※事前申し込みは不要。(入館料要)

○「親子史跡めぐり—霞ヶ浦遊覧と史跡探訪—」 8月9日(火) 霞ヶ浦の醤油しょうゆの歴史をご案内します。

午前9時~午後4時まで(博物館集合。荒天中止) 参加料:1,000円(乗船代)

定員:40人(先着順) 申込方法:7月7日(木)から電話または直接

※ラクスマリナーの遊覧船と教育委員会のバスを利用します。昼食は各自でご用意ください。

★はたおり体験★ さき織り(裂いた古布をよこ糸に使う織り方)を体験します。

9月中の毎土曜日に実施。※要予約です。詳細は博物館までお問い合わせください。

★糸紡ぎワークショップ★ 糸車を使って、綿から糸を紡ぎます。

9月11日(日)・18日(日) ※要予約です。詳細は博物館までお問い合わせください。

★夏季展示は7月1日(金)~9月25日(日)までです。「霞」第17号は10月1日(土)発行予定です。★



博物館マスコット  
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

# 中峰和尚像（重要文化財）

げんじゅう は  
— 日本禅宗界に影響を与えた中国幻住派の祖 —

中峰和尚（1263～1323）は字を中峰、号を幻住道人と称し、遷化（高僧の死去をいう）した後に智覚禪師、普応国師の称号を贈られた中国元時代の著名な禅僧です。中峰の俗姓は孫氏といい、南宋の景定4（1263）年11月2日、首都臨安府に近い銭塘に7人兄弟の末子として生まれました。9歳で母親を亡くし、14歳の時には首都臨安府が元に無条件降伏するのを目にしています。この様なこともあってか翌年には出家を決意しましたが、父親の反対で願いはかないませんでした。しかし、仏道に憧れ読経や禅定を習っていた中峰は、24歳の時に生涯の師として仰ぐこととなる高峰和尚を初めて西天目山に訪ね、翌年ようやく出家を果たしました。

元貞元（1295）年、中峰33歳の年に師である高峰が58歳で遷化すると、中峰は西天目山を下り各地を遊行します。その折々に仮住まいとして建てた庵を全て幻住庵と名づけ、自らも幻住と号するようになりました。時折、西天目山に帰ることもありましたが、多くは遊行を続け、大覚禅寺や靈隠禅寺などの名刹の招請を断っています。しかし、延祐5（1318）年、中峰56歳の年に西天目山獅子正宗禅寺に住して後は、61歳で遷化するまで再び下山することはありませんでした。この間、多くの日本人留学僧が中峰の教えを受けています。その中の1人に、大雄山法雲寺（土浦市高岡）を創建した復庵和尚もいました。中峰は元国のアユルバルワダ（1285～1320）皇帝とその嫡子シデバラ（1303～1323）皇帝からも帰依を受け、中国元時代の禅宗思想史に大きな影響を与えました。そして、復庵をはじめ中峰の教えを受けた日本人留学僧は帰国後、幻住派と称されました。

貞和2（1346）年、復庵は西天目山の珂月・善榮の2師に使いを送り、師である中峰の頂相（肖像画）を求め、それが現在法雲寺に伝わっています。山水画の描かれた屏風を背にして、払子を握り曲泉に坐す姿で、頭髪を少し生やして穏やかに微笑む中峰の表情が印象的です。縁側には朱色の欄干が設けられ、外には奇岩に笹が見られます。2人の伴僧の内、1人が皿を両手で持ち、もう1人が石榴を割っていることから、「石榴の御影」といわれています。肖像画の上部には、中峰直筆の賛が認められており、日本に現存する中峰像の中で最も優れた作品といえます。

（中峰自賛）「屏倚朱闌着幻滲、錦榴擘破欲何如、中峰安有此尊貴、一軸阿羅漢畫圖、西天目山幻住明本書」

\* 中峰和尚の事柄については、野口善敬「天目中峰研究序説—元代虎丘派の一側面—」『中国哲学論集』4号 九州大学中国哲学研究会（1978年）を参考とさせていただきます。（中澤達也）



中峰和尚像（法雲寺所蔵）

8/27（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも中世コーナーに展示）

- 中峰和尚所用の禅版（市指定文化財）
- 法雲寺文書「珂月禅榮二師覆書状案」「善榮書状案」



# 土浦藩の関流砲術

おおづつ こくしん

—大筒「谷神」(土浦市指定文化財)—

文政3(1820)年11月17日、関流砲術の大演習である「町打」が土浦藩領の中貫原(土浦市中貫)で行われました。「町打」とは10町(およそ1km)から30町も先の遠距離の的をねらうものです。江戸時代には多くの砲術流派があり、江戸では大森(現東京都大田区)や徳丸ヶ原(同板橋区)など広く見晴らしのよい原野で遠距離の射撃訓練を行っていました。関流では藩領の北部に広がる中貫原が選ばれ、藩主、藩士はもとより、周辺からも大勢の見物人が集まり、ふだんは静かな野原に筒音が響きわたりました。

「町打」は、打手が構える「打場塚」、藩主以下、重臣たちが見物する「御覧塚」、的を確認する人が身を守る「矢見塚」などを築き、周辺には土屋家の家紋入りの幔幕や竹矢来を廻らせた大がかりな訓練です。このため、町打は数十年に一度しか行われず、関家や一門にとって一世一代の大舞台でした。満を持して臨んだ関家の当主朋信、信藏らは堂々と大筒を放って、9代藩主彦直から褒美の小袖をいただきました。大筒とは砲弾の重さが50匁(約188g)以上のものです。関流大筒の特徴は鍛えた鋼を用いているため、砲身が薄いの堅牢であることです。大筒を打つためには、重い筒を抱えてねらいを定め、発射時の大きな反動をさばかねばなりません。長年修行を積んで初めて得られる技でした。

この時信藏の子、19歳の知信(1801~72)も衆目のなか見事に大筒を放ちました。彦直から「抜群の技量」と称賛されて褒美をいただいた上、無役から御馬廻格御番見習に取り立てられました。晴れ舞台での大成功によって、藩士としてのデビューを果たしたのです。

知信はその後も修行を続け、天保12(1841)年1月、江戸は下谷金杉町に住んでいた鉄砲師富岡左兵衛に900匁の大筒を発注しました。この時期、中国で起こったアヘン戦争の情報が日本にも伝わり、軍備増強の気運が高まっていました。近代砲術家の祖高島秋帆は、幕府に西洋流火砲の導入を建議しています。大筒「谷神」は2年半の歳月をかけて完成しました。銘の「谷神」とは「万物を生み出す、深くて空虚なところ(谷)にひそむ不思議な力(神)」(出典『老子』)という意味です。地道な修行を乗り越えてこそ精神と技量が充実し、大筒を打つことができると身をもって知っていた知信の意志が銘に表れているようです。

大筒「谷神」(土浦市指定文化財)は、平成22年度に修復が施され、筒に刻まれた金象眼「関内蔵助知信」の文字も往時の光彩を取り戻しました。



(木塚久仁子) 「谷神」金象眼「関内蔵助知信」の部分(個人所蔵)

7/23(土)午後2時から  
このページでご紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(近世コーナー「関流砲術」に展示)

- 大筒「抜山銃」(土浦市指定文化財)
- 関知信肖像(土浦市指定文化財)
- 「谷神」大筒注文記録



# 江戸時代の日記にみる夏の行事

## —山へ向かった人々—

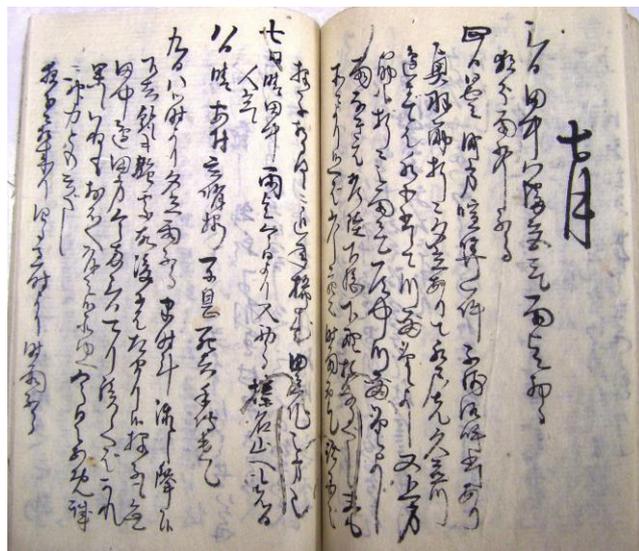
土浦城下で醤油醸造業・薬種業を営んだ色川三中和弟美年が書き継いだ日記「家事志（家事記）」は、城下町の様子を詳細に教えてくれる貴重な史料です。今回はその日記のなかから、大山と榛名山に向かった人々をご紹介します。以下、日付はすべて旧暦です。

文政10（1827）年7月1日の日記に、石尊参りにでかける岩田村の庄兵衛に薬をはなむけとして遣わしたことが記されています。石尊とは大山（神奈川県伊勢原市）の石尊大権現のことで、もともとは雨乞いの山として周辺の人々の信仰をあつめていました。江戸時代、山麓に住む御師（宗教者）が大山の霊験を説きながら御札を配って各地を歩き、その信仰を広めました。夏山とよばれる山開きの期間（6月27日～7月17日）には、山頂へ登拝する人々に対して御師が宿坊の提供や山内の案内をしました。大山詣りにあわせて鎌倉や江ノ島など周辺の名所を巡る旅は江戸の庶民に人気となり、大山詣りは夏の風物詩のひとつとなりました。先の文政10年の日記で三中は「今年は石尊参詣の者がおびただしい」と記しています。

色川家では石尊を「運の神」として信仰したようで、家業の建て直しのため一時中断していた大山詣りを文政13（1830）年になって再開しています。その後、ほぼ毎年のように代参者を大山へ向かわせたことが日記からうかがえます。三中自身も天保5年に箱根湯治へ出かけた折、大山へ参詣しています（6月27日）。天保10（1839）年には田宿町（現土浦市大手町）で石尊講が結成されました。土浦に大山信仰が定着し、夏に大山を目指した人々がいたことを日記が教えてくれます。

さて、田宿町に石尊講が結成された天保10年は日照りの年でした。7月3日に、城下町城分の氏神である田中八幡宮（現土浦市田中二丁目）で雨乞いが行われました。雨乞いは断続的に続いたようで、7日にも「田中雨乞今日より又初る」と記載されています。あわせて、榛名山（群馬県高崎市）へ向かった田中の人々がいました。目的は榛名山から水を迎えてくるためです。霊験ある高い山へ登り、その水を持ち帰って田畑や川に撒く雨乞いの風習は広くみられます（大山でも同様の風習がみられました）。7月11日に色川家では隣家とともに、結城に人を遣わして田中の一行を待ち受けて合流、13日に一行は土浦へ戻りました。そのご利益があったのでしょうか、翌14日の夜から15日の朝に雨が降ったことが記されています。

大山への参詣は毎年恒例のもの、榛名山はその年の天候不順によるものですが、夏の時期に遠く離れた山を目指した土浦の人々の姿がありました。（萩谷良太）



「家事記」（天保10年7月部分）（個人所蔵）

8/6（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 土浦御祭礼之図（レプリカ）（近世コーナーに展示）
- 大山信仰については『常総の大山信仰』（第28回企画展パンフレット：受付にて無料配布）をご参照ください。



# 商家と出入りの職人たち

しるしばんてん  
— 印半纏がつなぐ信用 —

紺色こんいろの木綿布もめん地で、背中まへえりや前まへ衿えりに店の屋号やごうや紋もんなどを白く染め抜いた半纏しるしばんてんのことを「印半纏」とよびます。印半纏は、ひと昔前まで、大工・鳶とび・左官さかん・屋根屋やねや・庭師にわしなどといった職人たちが、仕事着として着用したものでした。

職人たちは出入りの商店とくいさきや得意先から印半纏をもらいました。そのため、一人の職人が出入りをした店の半纏をいくつも所持することとなります。たとえば、写真はある庭師にわし（造園業）が所持していたものです。料亭りょうてい・呉服店こふくてん・氷屋こおりや（製氷所）などがみられます。いずれも昭和時代のもので、その多くは中城町なかしょうまち周辺（現土浦市中央一丁目）に所在した有名商店です。なかには、仕立てられていない反物たんものもふくまれていました。年の暮れなどに職人たちは出入りの店から反物をあたえられると、それを奥さんに渡して、身の丈たけにあわせた半纏に仕立ててもらったそうです。そして、店から頼まれて仕事をするとき、普段の仕事着の上にその店の印半纏を重ね着して通いました（このことから印半纏は「通い半纏」とも呼ばれていました）。また、通いの店で人手が必要となる暮くれや初荷はつに（初売り）のとき、祝儀しゅうぎ・不祝儀ふしゅうぎ（葬式）などには、これを着て手伝いにかけたそうです。とくに不祝儀の時には、職人達はみな印半纏の姿で参列したそうです。

かつての町場の人たちならば、印半纏をみて、一目ですぐにどこの店に出入りをしている者なのかを特定できたのではないのでしょうか。ということは、印半纏を着用して町を歩くということは、職人の行動がその店の信用に関わってくることを意味したはずで

です。佐賀純一さんが編集した『商人と街ぐらし』（※）は、古老たちのいきいきとした「語り」によって土浦のすがたが描きだされた好著です。そのなかで、質草しちくさになった印半纏についての話が収録されています。とある質屋が質流れになった大店の印半纏を通りにさらしておいたところ、店の信用に関わるということで、さっそくその店が買い取りにきたというエピソードです。印半纏が商家にとっていかに大切なものであったのかを教えてください。

印半纏を与える行為の背景には、商家からは職人に対する信頼が、それを着用する職人にはその店に対する責任があったと思われます。町場に住む職人と商店のくらしは相互扶助そうごふじよのなかで営まれていました。印半纏は、町で生活する人と人とのつながりを私たちに教えてくれる資料なのです。

※佐賀純一編『伝聞ノート2 商人と街ぐらし』

（ふるさと文庫、1982年、筑波書林）

（萩谷良太）



ある庭師が所持していた印半纏（当館所蔵）

9/3（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

- 下記の資料もあわせてご覧ください。
- マッチラベル（近代のコーナーに展示）
  - 絵葉書（近代のコーナーに展示）
  - 商家の出荷風景（写真パネル）



# 明治期の入園願 —土浦幼稚園を支えた人たち—

小学校の義務教育がはじまったのは明治 19 (1886) 年のことで、尋常 4 年・高等 4 年のうち尋常小学校の 4 年間が無償となりました。このような時期の小学校のうち土浦町の土浦小学校には、明治 18 年に開園した附属の幼稚園（現土浦市立土浦幼稚園）がありました。幼稚園は有償でした。

小学校に通える子供がようやく増えてきた時代の有償の幼稚園には、いったいどんな子供が通っていたのでしょうか。それを知る手掛かりとなるのが、土浦幼稚園に残されている「入園願綴」と「退園願綴」です。明治 22 (1889) 年から大正 9 (1920) 年までの手書きの願書が綴られたもので、2,500 人余りの子供の氏名・生年月日・住所・保護者にあたる氏名などが記されています。これらを見ていくと、まず住所からは 8 割以上が土浦町の子供で、残る 2 割は住所が記載されていない人もいます。かつ、隣の真鍋町や他府県の出身で親が官吏や教員、あるいは鉄道関係の仕事であるために、寄留という形で住民になっている人もいます。また保護者には、奥井久助・尾形吉兵衛・矢口庄七といった江戸時代から続く商家の氏名がみられます。

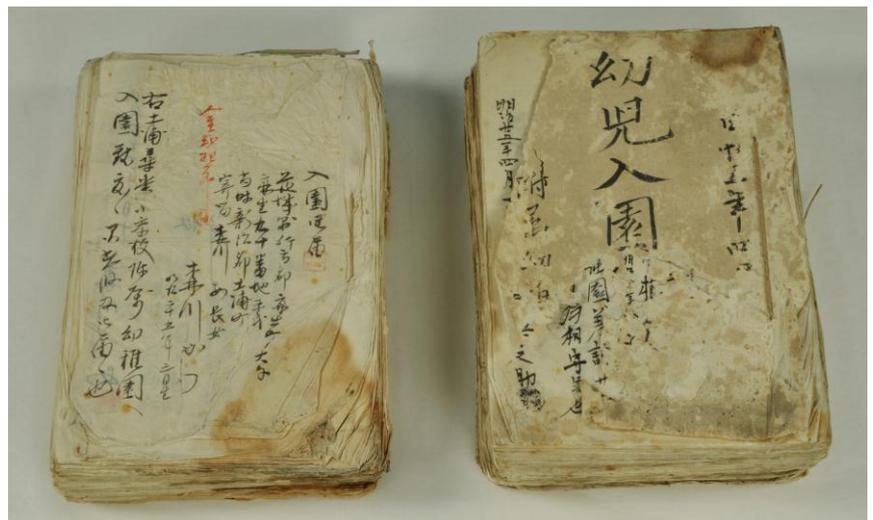
費用はどの位かかったのでしょうか。明治 24 年の入園願には朱書で 1 ヶ月の保育料が記されています。それによると、4 段階に分かれており、1 等が 30 銭、2 等が 20 銭、3 等と 4 等がそれぞれ 10 銭となっています（10 銭が現在の 1,000 円程度）。土浦小学校では、児童の保護者の宅地の評価額をもとに授業料が算出されており、幼稚園でも同様であったと考えられます。

入園願の一部には保護者の職業が記されています。米穀商や呉服商、料理店や提灯屋など様々な商人はもちろんのこと、大工や左官といった職人、判事や弁護士、教員や官吏・銀行員などの役所や学校・金融機関に関連する仕事、船乗業や鉄道会社社員など水運と鉄道が両立していた土浦の土地柄ならではの仕事、人力車夫や荷車挽といった現在ではみられない仕事など多種多様です。

町を構成するさまざまな職業の親をもつ子供が集まっていた幼稚園。もちろん有償であるがゆえ、誰にでも開かれていたとはいえませんが、保育料に段階をつけるなどして、比較的広い層の子供を受け入れたことで、多様な層の町民の子弟が平等に教育を受ける機会を得ていたといえるでしょう。

そして、幼稚園に子供を通わせることが幼児教育を支えることにつながったのだと思います。

(野田礼子)



「入園願綴」（土浦市立土浦幼稚園所蔵）

<p>7/2 (土) 午後 2 時から このページでご紹介した 資料の展示解説会を開催 いたします。</p>	<p>下記の資料もあわせてご覧ください。 ● 開園の鐘（近代コーナーに展示） ● 図書器械名簿（近代コーナーに展示） ● 「幼稚園の思い出」（近代コーナーメッセージ展示映像「体験談」）</p>
--	--



# 市史編さんだより

## 土浦藩士の交流 —書状が伝える激動の歴史—

博物館に保管されている資料の中に、幕末の同時期に土浦藩の要職や土浦藩校郁文館いくぶんかんの教官を務めた小林涉と安藤量平（齎齋）の書状が残されています。二人は、頻繁に情報交換をしていました。（小林家・安藤家の資料については『土浦市史資料目録 第二十一集』に目録があります）

当時土浦藩は、藩主土屋寅直ともなおが嘉永3（1850）年に大坂城代になったことから、日本の海防についての情報を多く入手していました。涉は、兵事係として寅直に同行しました。嘉永7（1854）年9月18日にロシア使節プチャーチンの艦船が大坂湾の天保山沖にあらわれた折には警備策を立てて藩主から賞賛されました。同じ頃、量平はくにもと郡奉行としてひがし東郷・きた北郷組の支配を担当し、年貢収納などに尽力して横麻上下かみしもを下賜されるなどの活躍をしています。二人は、大坂と土浦（江戸近郊）での切迫した情報を相互に送りあいました。その書面には、当時の藩士たちの考え方も綴られており、人々が将来の日本をどのように思い描いていたのかを知ることができます。

具体的に書状の一部を見てみましょう。（ ）内は意識です

「（前略）……先月廿四日二天保山江乗入候趣風聞二而承り候間、御次向申談て一使御座候歟、又は御人数二而も被差出候ハ、早速登坂可仕と内談相整待居候処……（後略）」

（先月<9月>24日に天保山へ<異国船が>乗り入れたとのことを風聞で知りましたので、使いが来るだろうか、または<対策のために>人を出すようならば<江戸・土浦からも>応援の人数を大坂へ向かわせようかという内談が整って待っていたところ……）（安藤家文書 目録番号4）

これは、嘉永7年10月5日に出された量平から涉への書状です。大坂での情報は風聞として国許へも伝わり、対応を協議していた様子が窺えます。

また、国許を心配する涉から量平への書状もあります。

「（前略）…去ル廿四日二御貴地も大荒之由、御城内外御損所も夥敷作方大痛、殊ニ山根辺欠崩二而御田地も取潰出来候由、誠ニ恐入御同嘆之至二候…（後略）」

（去る<7月>24日にご当地も大荒れだったそうで、御城の内外に被害が出た所も多かったそうですね。また農作物も大損害で、殊に山根地区は土砂崩れで田が埋まったりしたそうで、私も心を痛めております）（安藤家文書 目録番号54）

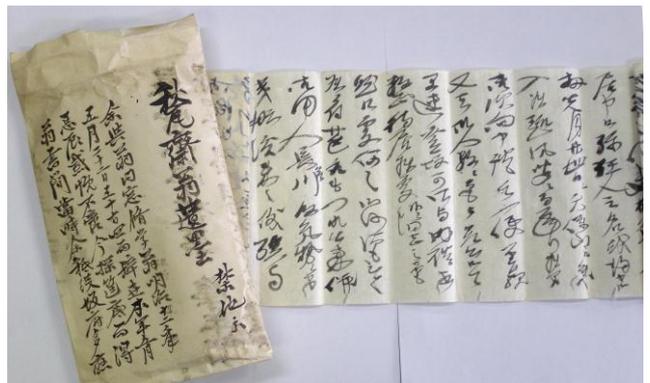
ほかにも端裏書きに「秘 小林」と書かれた涉から量平に送られたと思われる写し文書もあります（安藤家文書 目録番号15）。安政5（1858）年6月23日から安政6年7月22日まで老中を務めた太田備後守（資治）の外国船への開港に関する書状です。安政5年に日米修好通商条約の調印が行われていますので、それに関連した情報を入手した涉が国許の量平に知らせたものと思われる。

安藤家には涉から安藤家に贈られた安藤量平の書状の束が残されていました。安藤家へ養子に入った近次氏に贈られたもので、近次氏に量平の人柄を知って欲しい、と願った涉の思いがこもっています（安藤家文書 目録番号4 写真参照）。

前掲の天保山沖への異国船乗り入れについての対応を書いた書状もこの束の中にあります。

このように、当時の書状類から土浦藩士の交流や心情を知ることができるのです。

（非常勤職員 江島万利子）



「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、博物館の映像製作を多く手掛けていただいている茨城ビデオパックの岩崎真也さんにご寄稿いただきました。

## 「文化財映像学」を考える

私が文化財映像に取り組んだ最初の仕事は、土浦市立博物館の開館に合わせ製作した「土浦の伝統稲作」「土浦地方の灯心」「土浦の年中行事」の3つの作品でした。土浦市立博物館が開館したのが昭和63(1988)年7月ですから、23年も前になります。それ以来、県内を中心に製作した文化財(文化遺産)関連の映像記録は、70本を数えるまでになりました。作品も祭礼、芸能、工芸、古建築、遺跡調査、伝統産業など多岐に渡っています。私が実施している製作手順は、まず、現地の方々のお話を聞き、専門家の助言を求め、さらに一次史料があれば、必ず目を通すようにします。そして文化財の種類や作品の目的に合わせ、映像表現の方法を模索しながら撮影や編集を進めてゆくのです。これはある意味「文化財映像学」といってもよいのではないのでしょうか。私が「学」という言葉にこだわるのは、映像と音声で文化財を記録する場合、史料や情報の収集、分析を行い、それらを多くの人に解りやすく(できれば、感動的に)表現するにはどのようにすればよいか、という考察を伴うからです。と同時に、映像表現者としての専門的な技術と感性が必要だからです。その結果、見る人に文化財本来の魅力を伝えることができ、未来への資産にも成りえるのだと思うのです。さらに、地元の人々に感謝され、改めて「自分達がこの価値の高い伝統文化を保持してきたのだ」という誇りを抱いていただけたら、製作者冥利に尽きるというものです。

文化財の映像記録は、作り手側に文化財の知識と映像技術が必要なのは言うまでもありませんが、ふるさとの文化や伝統をいつくしみ伝えてゆくという意志が最も大切なのだと考えております。

(茨城ビデオパック 岩崎真也:写真中央のカメラ)



2010年度製作「土浦地方のはたごしらえ(企画:土浦市立博物館)」撮影の一コマ

## コラム(16)ー総合展示の展示替えー

平成19年のリニューアルから4年目を迎えました。この間の新しい取り組みのひとつが定期的な展示替えで、学芸員で分担しながら行っています。

私は近代コーナーを3ヶ月ごとに一新しています。「マチの近代化」「マチの教育」という枠組みの中でテーマを検討し、展示物をイメージしながら、配置図を作成し解説を考えます。今展示してある資料を収納し、新たな資料を出すという入れかえのため、それぞれの収納場所もよく確認しておきます。

いよいよ展示作業です。閉館後の日曜日の夕方から月曜日を利用し、必要な用具やスペースを整え、展示物・パネル・キャプション(資料の解説)の片付け、ケース内の清掃をします。ここまですぐ撤収で、それから新しい展示です。壁面と床面をパネルや展示台でととのえ、そこに資料を並べキャプションを添えます。バランス・安全性・明るさを配慮し仕上げていきます。

なぜ展示替えをするのか。さまざまな資料をご紹介すること、そして特に重視しているのは繊細な資料の退色や劣化を早めないことです。あつという間の3ヶ月ですが、ご来館いただくたびに新しい資料との出会いや発見の場となればと考えています。

(野田礼子)

## 情報ライブラリー更新状況

【2011・7・1現在の登録数】

古写真	472点(+5)
絵葉書	379点(+5)

※( )内は2011年5月14日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

## 霞(かすみ) 2011年度 夏季展示室だより(通巻第16号)

編集・発行 土浦市立博物館  
茨城県土浦市中央1-15-18  
TEL 029-824-2928  
FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1~6ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

2011年度秋季展示は、2011年10月1日(土)~12月25日(日)となります。「霞」2011年度秋季展示室だより(通巻第17号)は10月1日(土)発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。